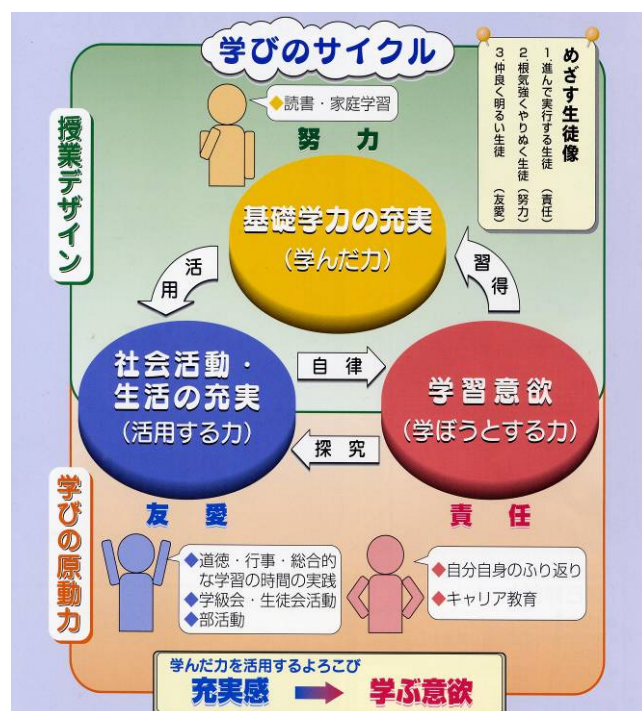


A-1 学校研究の概要

これまでの教育活動で培われてきた「学びの原動力」¹を土台にして、その上に「授業デザイン」²を積み上げることによって、さらなる教育活動の充実を目指したい。

学習意欲があってこそ、基礎学力の習得が可能になってくる。また、その身につけた基礎学力を活用することによって学ぶ意義がはっきりし、学びが充実してくる。その充実感が、さらに次の意欲につながっていくといった「学びのサイクル」³を確立したい。この「学びのサイクル」を確立することによって、研究主題に迫り、本校の目指す生徒像につながるものと考え。

「学びのサイクル」を確立するためには、特に基礎学力を活用するための「授業デザイン」が重要であり、本研究では、「授業デザイン」を中心に据えることとした。そして、それを支える「学びの原動力」さらに「現職教育」にも視点を当てている。以下に、「授業デザイン」「学びの原動力」「現職教育」の3つの視点からの研究方針を示す。



1 生徒が意欲的に学ぶことができる授業づくり（授業デザインの視点）

本校では、これまでの道徳の研究を進めるにあたって、「授業のできる教師」を目指して研修を重ねてきている。「授業のできる教師」とは、魅力ある授業を行い、ねらいに迫れる力を持つ教師のことである。そのためには、いかに教材を深く読み取り、適切な発問を用意するかで決まってくる。

このことは、教科指導にも共通している。生徒がタイムリーに求めている教材を準備し、その教材を深い部分までしっかり解釈し、適切な指示や発問を準備していれば、自ずと魅力ある授業をつくることができる。そのような授業を行えば、知識・技能が生徒にとって価値のあるものとなり、その理解を自分の言葉で生き生きと説明できる活用力につながっていくと考える。

2 授業規律と生徒にフィードバックする評価（学びの原動力の視点）

授業の中では、認知面、情意面の双方が複雑に絡み合った営みが展開されている。活用型授業⁴の中では、自他を認め合った雰囲気の中で、いろいろな意見を発表する場面が重要になってくる。そのために、授業の雰囲気をつくる「教科に共通する授業規律（学習態度）」を大切にしたい。これは、今までの道徳の授業研究で培ってきたものであり、これからも継続し各教科にも反映させたい。

評価には、学期末に行う「総括的評価」⁵と、学習活動の進行過程でなされる「形成的評価」⁶がある。

¹ これまでの行事や生徒会活動などの教育活動で培ってきた成就感が基盤となった様々な取組みに対する生徒の意欲。

² 授業の展開の中に知識・技能を習得する場面や活用する場面を意識して取り入れた授業づくりのこと。

³ 研究構想図での、学習意欲→基礎学力→生活場面に活用→学習意欲→基礎学力・・・といった大きな循環を示している。

⁴ 授業の中に、身につけた知識・技能を駆使する場面がある授業。

⁵ いわゆる評定のことである。

生徒にフィードバックできる評価として、この「形成的評価」を大切にしたい。

「形成的評価」をする場面としては、授業中での生徒の良さを認めたり、基礎的な知識・技能の定着の度合いを教師がモニターするもの（ワークシートのふり返りなど）がある。授業の中では、活用という観点から、生徒の表現活動の場面を設けて、価値の高いものをほめることを通して、生徒の思考力、判断力を育てていきたい。また、ふり返りなどで明らかになった基礎的な知識、技能の定着が不十分なものについては、生徒にも意識させ、家庭学習などで補っていきたい。

3 教師同士の学び合い（現職教育の視点）

これまでの道徳研究では、指導案検討や授業交流などを積極的に行ってきた。この教師の態度や視点が各教科でも活きるように、お互いの教科の授業を見合う授業交流週間を、一昨年度から視点を明確にして実施してきている。他教科の授業でも、授業のデザインや授業規律など参考になることが多く、結果的には自分自身の授業力向上につながってきている。

昨年度からは、拡大教科部会も立ち上げて、指導案づくりの段階での模擬授業など教師がお互いの良いところを学び合える校内研修会の充実を図っている。

⁶ 授業中でのプロセスを評価するもので、生徒はその評価を現在の授業に生かすことができ、学習意欲につながる